

「 国と力と栄えとは限りなく汝のものなればなり 」

ヨハネの黙示録 5章 11節～14節

説 教 鷹澤 匠牧師（大和キリスト教会）

新しいパイプオルガンが大和キリスト教会に設置された。すると、集う人々の讚美の力が強くなってきたようだ。讚美歌を歌うことは大きな喜びであり、魂が潤う経験をする。この体験が神様をほめたたえることになる。私たちが交わす会話や歩み、人生そのものが神様をほめたたえるものとなるように、讚美歌を歌い続けている。

聖書の中で、詩篇は最も多い祈りのことは集であり、讚美歌集である。その次に黙示録が続く。ここで、改めてヨハネの黙示録第5章1節から読んでみる。「わたし」と語られているのは黙示録のヨハネ。このヨハネは、「ヨハネによる福音書を書いたヨハネ」とはおそらく別のヨハネであろう。ヨハネは当時の教会の指導者であって、パトモスという島にいた。島流しの刑に遭っていたのであろう。しかし、ヨハネは祈る。信仰の危機を迎えている人々がいたことを覚えて。

その時、神様が天の幻を見せてくださった。その幻が第4章から始まっており、ヨハネは玉座に座られる神様のお姿を見る。そして、第5章。その神様の右の手に巻物があるのを見た。この巻物は「神様の御心」。神様が、この世界をどのように考えられ、これからどのようになさろうとお考えなのか。そこにはアジア州の七つの教会のことも含まれていた。しかし、この巻物の封印を解くことができない。誰ひとり、この封印を解くことができる者、ふさわしい者が見当たらない。ヨハネは激しく泣いた。

人々はヨハネに尋ねたであろう。どうしてこのような迫害を受けるのかと。何故、神様は黙しておられるのかと。ヨハネは答えに窮し、神様に祈り続ける。神様の御心が知りたい。ご計画をほんの少しでもいいから見せて欲しいと。巻物があるのに読むことができない。すると、長老が語る。その巻物をユダ族の獅子、ダビデの若枝である方が、解かれると。その方はイエス様のことであった。

ヨハネはその時、イエス様のお姿を見たとき6節に記されている。「七つの角と七つの目を持つイエス様」。黙示録は想像力を越えた想像力で読む必要がある。「角」は力の象徴。「七」は完全数。「完全な力を持っておられるイエス様」を意味する。「七つの目」からは「世界中、どこにい

ても、イエス様が見ていてくださる」ことが分かる。既に、人々の嘆きを全部ご存じでおられるのだ。小羊であるイエス様が巻物を受け取られたら、天における讚美歌の大合唱が始まる。イエス様こそが、封印を解くにふさわしい方である。

香が焚かれ、「その香は聖徒の祈りである」と黙示録が語る時、私たちの心を打つ。つまり、アジア州の七つの教会の祈りは、決してむなしなものではなかった。大合唱がさらに広がり、御使たちが登場する。見渡す限りの御使たちの群れをヨハネは見た。そして、ヨハネが最後に見たのは、造られたもの全てが讚美歌を歌う光景であった。

今、ここにいる方々が讚美する声。この声は聖堂の高い天井を突き破るようして天の大群と共に讚美している。ヨハネは「ほふられた小羊」であるイエス様をほめたたえる讚美歌を歌っている。

ところで、今日の聖書の箇所には一回もイエス様のお名前は出てこない。「ユダ族の獅子」、「ダビデの若枝」、「ほふられた小羊」と呼ぶ。これは、明らかに、「イエス様が、まことの王であること」を示している。「わたしたちのまことの王は、ローマ皇帝にあらず。まことの王は、主イエス・キリスト。体を殺しても魂まで殺すことができない者を、私たちは、恐れぬ！」。人々から散々恥を受け、手足に釘を打たれ、血を流され、最後に槍で脇腹を刺された、そのお方が、私たちの王である。

グリュネヴァルトが描いた「イーゼンハイムの祭壇画」という絵がある。既に息を引き取られた姿が描かれている。全く美化されていない。この十字架のキリストのどこに勝利があったのか。イエス様の十字架の死こそが神様の勝利であり、御心であり、神様が望まれたことであった。これが、私たちのための「愛の勝利」であった。その愛が、私たちを罪からあがない、私たちを御国の民、「教会」としてくださったのである。苦しみ抜いてくださったキリストこそが、神の国であり、神の力であり、神の御栄え（栄光）である。その神の国の栄光に、私たちは自分の十字架を背負って生きる。

（記 説教要約奉仕者）